

病院を美術館に

磐田市立総合病院 × 静岡文化芸大

磐田市立総合病院（同市大久保）が、無機質な病棟に芸術を取り入れて患者の不安や緊張を和らげる「ホスピタルアート」の取り組みを始めた。静岡文化芸術大（浜松市中区）の学生の協力を得て、院内に美術館のような芸術作品の展示手法やデザインを取り入れ、患者とスタッフの癒やしやぬくもりの空間を演出する。（夏目貴史）



病棟内の展示コーナーを模様替える学生たち（磐田市立総合病院で）

誰からも親しまれる病院を目指そうと、ホスピタルアートのノウハウを持つ同大文化政策学部の高島知佐子准教授に依頼。昨年末から学生約二十人が、院内の視察やスタッフとの意見交換などでアイデアを出し合い、「楽しく、落ち着ける病棟の空間作り」をテーマにした取り組みをスタートさせた。

白壁をピンクに／作品分け見栄え良く

「ナー」の模様替え。無機質な白壁の廊下などに飾られた市民ボランティアなどによる作品の展示コーナーは、統一性がなく、見せるための工夫に欠けていた。

学生たちは、ぬくもりを感じるピンクやオレンジなどの布で白壁を覆い、緩やかに色が変化するグラデーションを付けた。作品は、ジャンル別に仕分けたり統一したキャプションを付けたりして飾り、全体のバランスを整えた。

これまで無機質だった展示コーナーは、美術館のような装いに変貌。入院患者から「病棟が明るくなって、作品の見栄えも良くなった」と好評を得ている。

今後は、待合ロビーなどの大空間に立体作品を設置する「インスタレーション」や床などにイラストなどをデザインするアートを計画。三年生の藤巻嘉月さん（20）は「患者さんにぬくもりを届け、病院スタッフがコミュニケーションが取りやすくなるアートをしたい」と意欲を示している。

病院施設は、管理や安全面で大胆な模様替えや作品展示に規制があるが、鈴木昌八院長は「学生の感性やノウハウを取り入れ、誰もが快適に使える施設に挑戦したい」と期待している。